



## 日本史② (紀元前後の日本列島)

12月②のごあいさつ

山内公認会計士事務所

2023年12月11日(月)

「楽浪海中に倭人有り、分れて百余国となる。」(紀元前1世紀の日本)と、前漢の正史である漢書・地理志に記されている。

また、後漢書・東夷伝には、「建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。光武(後漢の光武帝)、賜ふに印綬を以もつてす。」(漢書・地理志から約100年後、1世紀の日本)とされている。

弥生時代における農耕社会の発展は、身分・階級を生じさせ、政治社会の形成を促進して各地に小国を生じさせたと思われる。

これらの記録によって、紀元前1世紀頃から日本には、多くの小国が分立しており、楽浪郡を通じて、中国王朝と交流を持っていたことが知られる。

小国の王たちが中国王朝に朝貢したのは、中国皇帝から首長として地位を承認されることによって、一国内での支配権を強めようとしたためであろう。

光武帝から奴国王に与えられた印綬は、この地位の証である。

後漢書は、さらに2世紀後半に倭国に大乱が起こったことを記しているが、政治的混乱と統合が進められている状況が推定される。

1784年(天明4年)、博多湾頭の志賀島から発見された「漢委奴国王」の刻文をもつ金印は、「後漢書」に見える、光武帝が奴国王に授けた金印と推定されており、後漢書・東夷伝がますます身近に感じられる。

弥生文化は、そのまま稲作文化であるともされている。

日本への稲作の渡来については様々に言われているが、中国で大量の炭化米を出土した浙江省の河姆渡遺跡(約6,000~7,000年前)から見て、稲のルートは、長江下流—山東半島—朝鮮—日本とされ、また別の説は江南から台湾を経て、南西諸島を島づたいに北上して南九州へ伝わったとされている。

中国では、220年に後漢が滅び、魏・呉・蜀の3国分立時代となった。貨幣を統一した魏は、楽浪・帯方の二郡を接收して、再び朝鮮に対する中国の直接支配体制を確立し、その先の邪馬台国をも支配下に置こうとした。

当時、中国周辺の人口大国は、ジャワ(インドネシア)と倭(日本)の二つであったと言われ(現在も同様である)、中国の魏王朝も倭(日本)を重要視していたことがわかる。

参考：(日本史史料集 山川出版社、日本通史 复旦大学出版社)